

金型業界のレベルアップに貢献 型材研究会、 40年の歴史に幕



第325回型材研究会のあと、竹内氏への「感謝の集い」が催された

1954年（昭和29年）から40年間続いた「型材研究会」（主宰：竹内型材研究所・竹内煌会長）が3月23日に第325回で最終回を迎え、その歴史に幕を閉じた。

同研究会は通称“型研”として親しまれ、金型メーカーはもとより、金型の設計・製作に携わる多くの技術者、研究者に技術や人的交流の場を提供してきた。「つねに“いま、金型業界で何が問題か”を追いかけてながらやってきた」と竹内氏が語るように、取り上げたテーマは金型材料、熱処理方法から金型の構造や標準化、加工技術、そして省力化と、その時代のニーズを反映したものばかり。

「昭和30年代の型研は、さながら水滸伝の梁山泊のようだった。金型技術の向上に意欲を燃やす多くの若い技術者が集まり、伝統や限界意識にとらわれず、

新しい発想で金型製作に挑戦していた」（吉田技術士研究所・吉田弘美氏）。

また、金型技術の近代化になくはない標準化・規格化の動きも、型研のメンバーを中心に始まった。それが現在では、日本プレス工業協会規格やJISへと発展している。

型研が発足した当時、発展途上にあり、欧米には数十年遅れているといわれた日本の金型技術・プレス技術も、現在は世界のトップレベルにある。「技術レベルも上がり、海外での生産が増えるなど、金型づくりの環境も変化している。型研の役割も一応終わった」（竹内氏）。

所属や年齢に関係なく、誰もが自由に参加でき、発言できる型研が、日本の金型業界を現在のレベルまで発展させた原動力の1つであったことは間違いない。



最終回となった第325回型材研究会。テーマは日本の金型技術の経過と今後の展望